

メランコリー親和型

2023年9月27日

『そもそも論』の第7回。今回は「メランコリー親和型」の話です。もともとは鬱病の病前性格として名付けられたものですが、一般化して気質・性格の一型と考えます。几帳面で責任感が強く、少々無理なことでも引き受けてくれるので、職場ではありがたい存在です。

しかし、やってくれるからといってどんどん仕事を任せていると、本人のキャパシティを超えてしまって内因性鬱病(古典的な鬱病)を発症してしまうおそれがあります。また、業務上のトラブルが発生したとき、メランコリー親和型の人は自責の念が強いので、人を責めずに自分に矛先を向けます。こういう状況で上司などが「原因は何だ」とか「なぜ対策をしておかなかったのだ」などと問い合わせると、傷口に塩を塗ることになって容易に鬱病を来してしまいます。本人の考え方や行動を尊重し、支援する態度が必要です。

このタイプは自分からはなかなか不調を訴えませんので、体調はどうか、無理はしていないか、上司が積極的に顔色を観察し、心身の状態を聞き出さなければなりません。安全配慮義務の一つです(電通事件最高裁判決、2000年)。

労働者の心身の特性は多用です。上司は部下の気質・性格や耐容力をしっかりと見抜き、それぞれに合わせた仕事のさせ方をする必要があります。